

あとがき

本書を執筆した5人は、同じ大学で西洋史を専攻し、現在熊本・福岡周辺の大学・短大で歴史関連の講義を担当している。担当する科目は「西洋女性史」「アメリカ史」「外国史」「現代史」、あるいは「生活文化史」などであるが、いずれも女性史への関心を持ち、手ごろな外国女性史の概説または入門用のテキストがあれば、という思いをいできてきた。実は20年前に、やはり同じ大学の出身者たちの共著で『現代人の西洋史』（法律文化社）というテキストが書かれたが、この中では「女性解放の思想と運動」と題する女性史が最終章に「補章」として付け加えられていた。この章の執筆を依頼されたのが5人の中の松田と私とで、この時以来いつか男性史の「補章」ではない、独立した女性史が書かれねばならないと考えてきた。

今回気鋭の若手研究者を加え、あらたにこの本をまとめることができたことを嬉しく思っている。各章の分担は次のとおりである。

- | | |
|------------------|------|
| I フランス | 松田昌子 |
| II イギリス | 井上洋子 |
| III アメリカ | 古賀邦子 |
| IV ドイツ | 星乃治彦 |
| V ロシア | 富永桂子 |
| VI 世界に広がる女性の連帯の輪 | 富永桂子 |

内容については、大まかな点で共通の枠組みをつくるほかは、各章はそれぞれの執筆者が個々の責任において重点を定め、叙述することとした。共通の枠組みとしては、まず対象とする時代をフランス革命を中心とする市民階級の台頭期から、「国際女性年」後の1980年代までとした。また女性の人権確立の指標として、参政権の獲得、法的地位の保障、教育の機会均等、労働の場における男女平等、などの実現にいたる過程と現状、そして現代のフェミニズムで大きく注目されている“性の自立”について、特に妊娠中絶問題にも資料が許す

範囲でふれることを申し合わせた。

結果として、各章間でいささか文体の相違や内容の構成に差異が目立つが、それは執筆者の個性として読者の方々のご寛恕をいただきたい。また、資料の入手や、時間的な制約もあり、十分な叙述になっていない点多々あることを承知している。これらについては今後も研鑽を続け、機会あるごとに内容の充実を図っていきたく考えているので、お気づきの点をご教示いただければ幸いである。

最後に、本書の出版にあたり終始励ましとお骨折りをいただいた法律文化社の田藤純子さんに、心からの感謝を申し上げるものである。

1998年9月

執筆者を代表して 井上洋子

【3訂版について】

初版から8年目に行った改訂から5年を経て、再度改訂をすることになった。この時期の世界では、深刻な経済不況による国内格差、国際間格差が拡大し、その解決が喫緊の課題となっているほか、民族間の紛争、核軍備競争の進行など、重大な問題が今後の展望に暗い影を落としてきた。こうしたなか、人々の健康で文化的な生活を維持すること、希望に満ちた次世代に向かう子どもを育成することへの希求はますます強くなっている。そのためには男女の強いパートナーシップが、今こそ求められているといえよう。

しかしその一方で、女性を伝統的な性別役割分業体制のなかに押し戻そうとする勢力は、いまだに社会を支配している。本書で取り上げた5つの国では、どのようにして新しい体制を実現しようとしてきたのだろうか。それぞれ近年の歩みを書き加え、資料にも新しいデータを加えている。

2011年11月